大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻公開講座

LCセミナー2025:ことば・文化・学びが出会う場所

本専攻では、平成 14 年度から毎夏開講してきた「教員のための英語リフレッシュ講座」を発展的に解消し、令和 3 年度から新たな公開講座「LC セミナー」をスタートさせました。LC は Language and Culture の頭文字で、本専攻の母体となった言語文化部の時代から親しまれてきた略称です。本講座では、グローバル化した現代社会の発展に必須である、最新の言語文化学の知見に触れる場を提供します。令和 7 年度は「ことば・文化・学びが出会う場所」と題して、超領域文化論、第二言語教育学、理論言語学など多彩な分野の第一線で活躍中の本専攻の若手教員が、海外の文学作品が示す現代的意義、多様性の時代における外国語教育、意味論から見た日本語という言語の不思議といったトピックについて、専門外の方々にも興味を持っていただけるように解説します。本講座を通して、参加者の皆さまが本専攻で取り組んでいる言語文化学と出会い、親しんでくださることを願っています。

■日　　程　令和７年9月20日(土)13時 00 分～16時40分(予定)
■会　　場　オンライン(Zoom)にて開催
■受 講 料　無料
■定　　員　300名(先着順、定員に達した時点で大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻HPに掲示します)
■受 付 期 間　８月４日(月)～９月 18 日(木)
■申 し 込 み　次のリンク先のフォームからお申し込みください。
https://forms.office.com/r/25wLHmfLwh
■問い合わせ　大阪大学　人文学研究科　豊中事務部庶務係
（ E-mail: jinbun-syomu@office.osaka-u.ac.jp　TEL: 06-6850-5201 ）
■プログラム

司 会　劉 驫 准教授

13:00～13:10	開会の挨拶	人文学研究科　言語文化学専攻長	里内 克巳 教授
13:10～14:10	講義1:　イロニーの文学者トーマス・マンと現代		鈴木 啓峻 講師
14:20～15:20	講義2:　英語を通して出会う多様性 ――トランスランゲージングを活用した日本の大学英語授業づくり――		キム ミソ 講師
15:30～16:30	講義3:「意味」の不思議 ――日本語の名詞接続詞「や」をめぐって――		ヤン ムイ 講師
16:30～16:40	閉会の挨拶	人文学研究科　言語文化学副専攻長	越智 正男 教授

＊大学院人文学研究科の情報は以下のサイトでもご覧いただけます。

人文学研究科 HP　https://www.hmt.osaka-u.ac.jp/
人文学研究科 Facebook　https://www.facebook.com/HmtOsakaUniversity/
人文学研究科 X　https://x.com/ou_hmt_info

司会者・講師プロフィール＆講義内容

司 会　劉 驫 コミュニケーション論講座 准教授

■プロフィール：京都大学で博士号（人間・環境学）を取得。専門は、語用論、談話理論。著書に、『談話空間における文脈指示』（単著、京都大学学術出版会、2015）『データを用いたことばとコミュニケーション研究の手法』(分担執筆、ひつじ書房、2023)、論文に<浅析《三言二拍》部分作品中的对称词－从历史语用学的角度出发>（『中国語学』264、2017)など。

イロニーの文学者トーマス・マンと現代
鈴木 啓峻 超領域文化論講座 講師

■プロフィール：京都大学で博士号（人間・環境学）を取得。専門は、ドイツ文学・思想。論文に、「対立するものの「イローニッシュな」結合――『ヨセフとその兄弟たち』と C. G. ユング」（『言語文化共同研究プロジェクト 2023 ――「文化」の読解 24：文化と環境』）、「ドミトリー・メレシコフスキーを読むトーマス・マン――「第三の国」におけるエロス的禁欲をめぐって」（『Germanistik Kyoto』、第 22 号、2021 年）など。
■講義内容：トーマス・マン（1875-1955 年）は、『ブッデンブローク家の人々』、『魔の山』などの作品で知られるドイツの小説家で、様々な二項対立の間の「イロニー」を思考の軸として自らの文学世界を構築しました。その代表的な例としては、インサイダー的な在り方とアウトサイダー的な在り方の対立を象徴する「市民と芸術家」の間のイロニーがあります。このように、矛盾する立場を「あれもこれも」的に留保する態度は、状況によって都合よく自らの立場を選択する「どっちつかず」の態度として批判されがちです。本講義では、マンがどのような状況下でこういった思考の型を展開したのかという点に加え、その現代的な意味について考察します。

英語を通して出会う多様性 ――トランスランゲージングを活用した日本の大学英語授業づくり――
キム ミソ 第二言語教育学講座 講師

■プロフィール：米国ペンシルベニア州立大学で博士号を取得。専門は、第二言語学習、言語アイデンティティー、質的研究方法論、トランスランゲージング。論文に、"Decolonizing ELT materials: a sociomaterial orientation" (ELT Journal 77、2023), "Student artifacts as language learning materials: A new materialist analysis of South Korean job seekers' student-generated materials use" (The Modern Language Journal 105、2021) など。
■講義内容：日本の大学生たちは英語を通じて、様々な言語、ジェンダー、人種、民族などの背景を持つ世界中の人々と出会っています。このように多様性の重要性が高まる時代には、英語教育もまた多様な人々を尊重しながら自分のメッセージを様々な意味資源を通して伝えることができるコミュニケーション能力を育てることが必要です。この点に着目し、本講義では学生自身が持っている知識、経験、意味資源をすべてコミュニケーションに活用するトランスランゲージングという概念を適用した英語授業の実例および成果を紹介します。AI を活用して英語で仮想インタビューを行い、整理した後に発表したり、日本で生活している多様な人々の物語をグループ発表として作り上げたりするなど、多様な人々と共存できる英語力を育てることができる事例を紹介します。

「意味」の不思議 ――日本語の名詞接続詞「や」をめぐって――
ヤン ムイ 理論言語学・デジタルヒューマニティーズ講座 講師

■プロフィール：米国コネチカット大学で博士号（言語学）取得。専門は、理論言語学、特に形式意味論。論文に、「Iffy discourse: Japanese moshi in conditionals and nominal topics」（2022, Linguistics Vanguard 8(s4)）、「Singularity and plurality of discourse reference to worlds」（2022, Proceedings of Semantics and Linguistic Theory 32）など。
■講義内容： 私たちの「ことば」は、一つの見方では、「形」と「意味」とを対応させるシステムとして捉えることができます。たとえば、「ねこ」という二つの文字を紙の上に見たとき、多くの人は、ペットとして飼われ、ネズミを捕る哺乳類を思い浮かべるでしょう。このような現象は一見すると当然のことのように思えますが、実は「形」と「意味」の対応関係の背後には、さまざまな複雑で不思議な要素が隠れています。本講義では、日本語の名詞接続詞「や」（例：「フランスやイタリアに行った」）に焦点を当て、意味論の観点から、この表現が示す意味の不思議について考察します。「や」は英語の “and” に対応するのか、それとも “or” に近いのか、あるいはそのどちらでも表現しきれない意味を担っているのか―こうした問いについて、近年の実験的研究の成果を紹介しながら論じていきます。